

子どもの事故防止を考える

特集
1

子どもの発達と事故予防

種市 尋宙 Taneichi Hiromichi 富山大学附属病院小児科講師
 専門：小児救急・集中治療
 小児科専門医、集中治療専門医、日本DMAT隊員、日本小児救急医学会代議員



子どもから目を離さない?!

子育てにおいて子どもたちの健全な発達を進めていくために、そしてその大事な命を守るために「子どもから目を離さないで!」という家族への指導は確かに必要なことかもしれません。しかし、それが絶対ではないということもあらかじめ社会として理解しておく必要があります。

つまり目を離さない努力だけをしていれば、事故から子どもを守れるかといえ、そうではないということです。両親、祖父母とも人間であり、エラーはつきものです。人間は金魚より集中することができないと言われたりもしています。目を離すことは大いにあり得ることで、

運が悪ければ事故に遭遇してしまいます。

しかし、そのリスクを下げる方法があります。それが事故予防において重要な位置づけとなっている環境改善、製品改善です。またメリハリをつけた注意を集中すべき点の理解も重要です。発達段階に合わせてそれらの実例を挙げていきたいと思います。

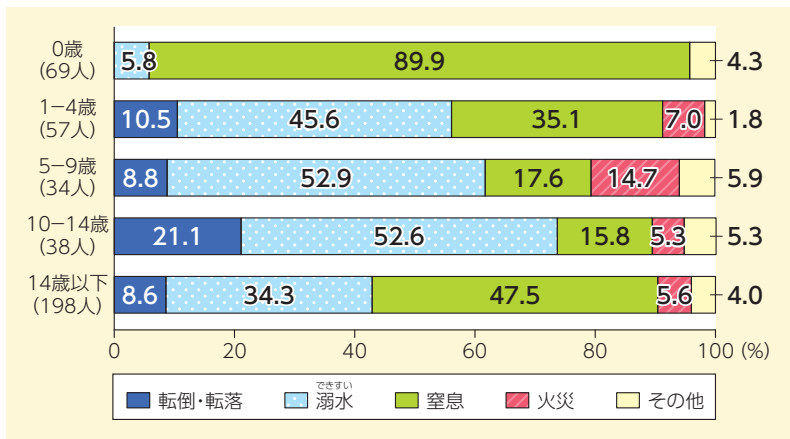
年齢ごとの事故における特徴

① 0～4カ月児

寝返りさえもまだできず、一人では移動することができない時期になります。それゆえ赤ちゃんが置かれている環境が重要になります。この時期で最も注意すべきものは窒息と乳児突然死症候群(SIDS)になります。

赤ちゃんの寝る場所はどこが一番安全でしょうか。わが国では「川の字で寝る」という表現があるように同じ平面で赤ちゃんとの寝る習慣がありますが、これは海外では危険な環境であると認識されています。できる限り柵のあるベビーベッドに寝かせてあげてください。一緒に寝ていた大人やきょうだいも意図せず圧迫してしまう、はね上げた布団で口と鼻を塞ぐなどの事態が起こり、この

図 不慮の事故における年齢層別の死因内訳



出典：平成30年版消費者白書(消費者庁)

図：筆者作成

時期の赤ちゃんは自ら払いのけることができないため窒息する場合があります。

また赤ちゃんの就寝環境に柔らかいものを置くことも避けてください。ぬいぐるみや柔らかい枕などは鼻や口を塞ぎ窒息させてしまうおそれがあります。ベビーベッドの柵に取り付けるようなベッドガードも危険です。海外では既に多くの報告が出ており、ベッドとそのガードとの間にできた隙間に顔を挟み込み窒息してしまいます。やさしさのつもりで行うことに危険なものがあり、赤ちゃんに対するやさしさのかけ方は少し難しいと感じます。

SIDSのリスク因子は既に周知されており、うつぶせ寝、喫煙(母のみならず周囲の家族も含めて)などが挙げられています。喫煙に関しては、赤ちゃんの安全のために、そしてご自身の健康のために家族全員の禁煙努力が望まれます。SIDSは症例の90%が6カ月未満に発症するため、その時期までは特に注意が必要だと思われまます。

② 4～7カ月児

昨日できなかったことが今日できるようになることを実感しだす時期でもあることから、成長を楽しむことができ、育児のやりがいを感じるでしょう。一方で事故の多発時期に入ります。寝返りなど徐々にちょっとした移動が可能となり、この時期に起きやすいものが転倒・転落です。ベッドやソファにいつもどおりに横に寝かせていたら大きな物音と泣き声で転落に気づき、慌てて急患センター受診ということが起こります。ソファにしてもベッドにしても寝返りなどで転落し得るような端には寝かせないことが必要です。特に目を離す場合はベビーベッド内が一番安全です。

6カ月頃からお座りの練習などが始まりますが、まだまだ不安定な時期でもあり、気を許した際に転倒して頭部を打撲することもあります。乳児期の脳は揺さぶりに大変弱く、賛否両論ありますが、ちょっとした外力で頭蓋内出血を起こす可能性も指摘されるほど脆弱ぜいじやくです。で

きる限り転倒・転落は避けるべきです。そして、赤ちゃんが喜ぶ「高い、たか～い」を避けてほしい理由も同様で、赤ちゃんの脳に急激な揺さぶりの力を加えないでください。

③ 7カ月～1歳児

ハイハイ、つかまり立ち、伝い歩き、一人歩きと移動範囲が大きく広がるため、転倒・転落のリスクはさらに高まります。文字どおり目が離せない時期に入ってきます。

またさまざまなものに興味を持つことから、手にしたものを口の中に入れて確認します。そのため、気道異物、異物誤飲が増える時期でもあります。気道異物としては、ピーナツが最多の原因として有名です。ピーナツは軽く、サイズも小さいために、笑うなどして大きく息を吸っただけで、のどに吸い込まれ、窒息します。子どもたちにとっては危険な食べ物であることの認識が必要です。2020年もピーナツの小児窒息死亡事例が報道されています。3歳までは特に要注意です。誤飲としては、たばこや薬など大人が床などに無造作に放置していたものをつかみ、口に持っていきます。1歳前後の子どもは薬のシートから錠剤を取り出すことも可能となり、薬物誤飲事例も起こります。

他にも誤飲におけるリスクが指摘されているものとして、ボタン型のリチウム電池があります。特に新品のリチウム電池は危険であり、大きな電力量を持つことから短時間で容易に粘膜に穴が開いてしまいます。誤飲すると食道潰瘍かいよう、胃穿孔いせんこうなどが起こります。これら危険なものは子どもたちがどれだけ背伸びをしても届かない場所で管理し、成長段階によってはイスなどを利用することも想定して、鍵や扉のある場所にしっかり保管しておくほうが良いでしょう。

子どもの誤飲が起こってしまう原因は大人の責任といえます。面倒でも一つ一つリスクを消していくことが重要です。しかし、幼いきょうだいがいると、この作業は困難を極めます。家中を常に整理整頓しておくことは現実的ではないため、赤ちゃんがいる場所を決めて、その場

所、部屋だけは床に物を置かないように注意し、各家庭の状況においてさまざまな工夫を試みることも求められます。散らかす原因となっているきょうだいを逆に味方に付けて、お片付けのやり方を教える機会にすると効率的な子育てにつながっていきます。誰かが一人で抱え込まず味方を増やすことも事故予防の大切な手法です。

④ 幼児期

幼児期になると活動範囲が広がることで熱傷や溺水事例が増加します。熱傷はさまざまな原因で起こります。製品関連としては、便利な電気ケトルや炊飯器の蒸気などで受傷します。便利なものにはリスクが伴っています。これらは蒸気が出ないなど事故予防の対策がされた製品があるため、小さなお子さんがある家庭ではぜひ安全なものを選んでください。

溺水は必ずしもプールや海だけで起こるのではなく、自宅の浴槽内でも多いことに注意が必要です。できる限り浴槽内には水をためたまま放置しないことと、どうしても難しい場合は浴室内に入ることができないように鍵をかけることが重要になります。また、入浴中の事故も多くあります。他のきょうだいに任せて大人がその場を離れたときに事故が起こっています。入浴中は他に必要な家事が重なる時間帯でもありますが、集中を切らさず注意する必要があります。浴槽用浮き輪の事故も多く報告されています。根本的に目を離してよい製品ではありません。家族が洗髪中などに溺水してしまう報告があり、危険なものとして認識し、過度に期待しないようにしましょう。日本小児科学会のInjury Alert(傷害速報)*という子どもの事故報告にも、同製品については再三にわたり警鐘が鳴らされています。

乳児期に比較して生命に関わる交通事故も急激に増加します。交通事故に関して、信号待ちの時はできる限り車道から離れた位置で待ち、

写真 家族連れ用駐車場の例(スイス ジュネーブ)



ショッピングセンター店内入口近くに設けられている 写真:筆者撮影

道路を横断する際は子どものペースに合わせて余裕を持って渡りましょう。また、駐車場内は極めて危険です。多くの車が行き交い、死角も増えます。子どもたちはお店に気を取られてしまい、飛び出すリスクも高くなります。車の乗り降りの際は細心の注意を払うとともに、日本にもお店の入口近くに家族連れ専用の駐車場が増えることを期待します(写真)。

転倒・転落に関しては、特にベランダに注意を払ってください。鍵をかけておくことはもちろんですが、いつの間にか手が届くようになるのが子どもです。余計なものはベランダに置かず、エアコン室外機なども登る手段として利用するため、設置場所に注意してください。子どもたちは自らイスを持ち出すこともあります。さまざまな想像を働かせて手すりを越えさせないように注意してください。

さいごに

これまで悲しい子どもの事故に対応する機会が少なからずありました。その都度、家族の悲しみと亡くなられた子どもの苦しみを思うと医療者も胸が引き裂かれるような思いをしています。だからこそ、そのメッセージを少しでも皆様の幸せな生活を維持するために役立ててもらい、小さいのちの存在を無にしないでほしいと思っています。さまざまな工夫のもと、大人が子どもを守り、不慮の事故がゼロとなる社会になっていくことを望んでいます。

* <https://www.jpeds.or.jp/modules/injuryalert/>